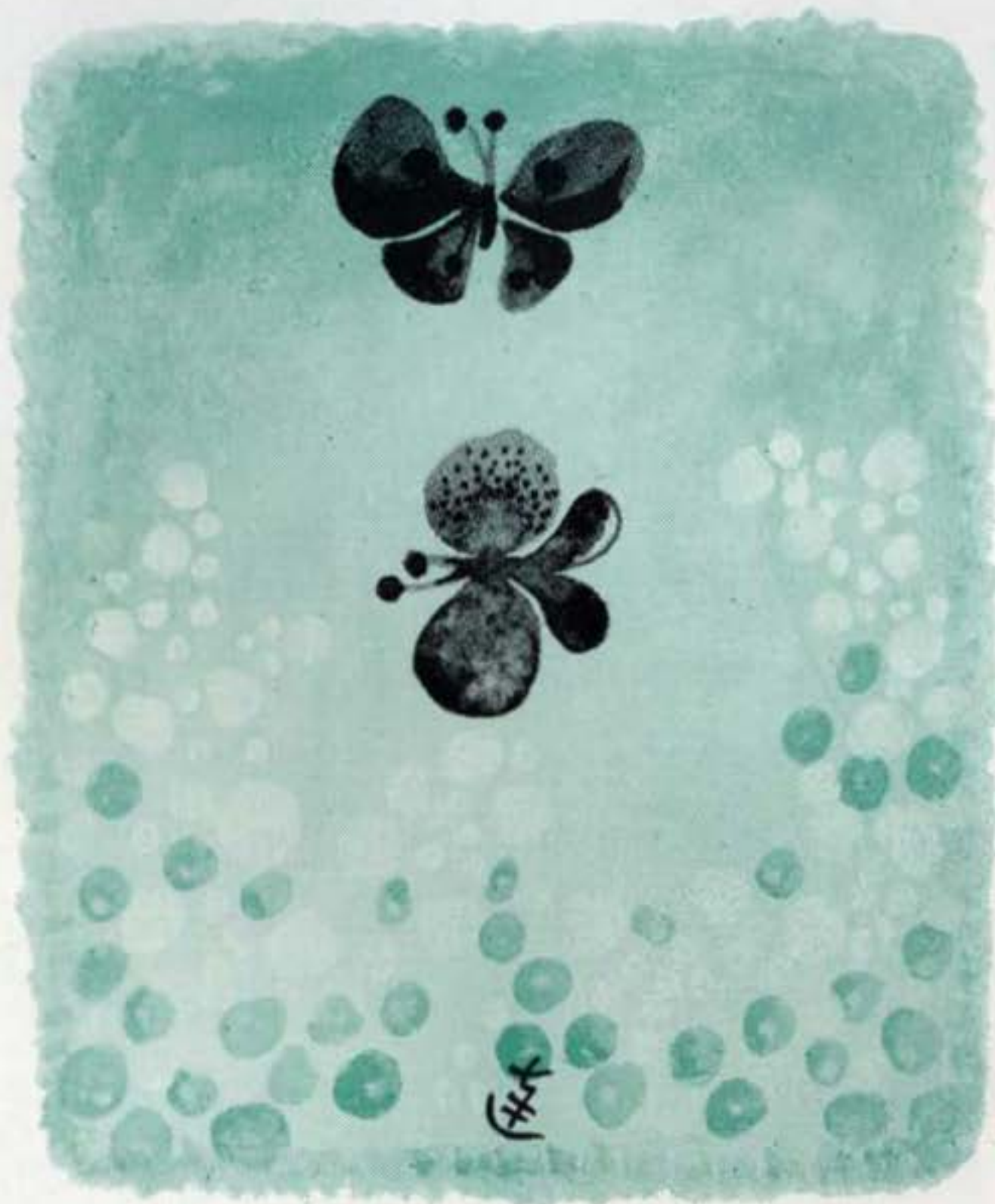


浄土

四月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別郵便)
昭和四十五年三月二十五日 印刷 昭和四十五年四月一日発行

第三十六卷

第四号



—目 次—

表紙「蝶々」松濤達文画

宇宙の光！ 悉達多の生誕……………	林 靈 法…………	(2)
二つの御遺訓＝御忌を迎えて＝……………	上 野 馨 雄…………	(8)
津軽の聖者＝貞伝上人の教化……………	浄土門主 岸 信 宏…………	(12)
社会時評 痛いところを叩かれた創価学会……………		(16)
聖典解説「小消息」の御法語に学ぶ④……………	小 沢 勇 貫…………	(18)
お念仏のご利益について……………	西 村 大 岩…………	(22)
念仏生活 五重相伝のお話し④……………	藤 井 実 応…………	(25)
聖典物語 カピラ城の滅亡④……………	つるたんせん…………	(30)
宝物シリーズ④ 初期のカブキ……………		(33)



今月のことば

△ひとすじの道▽

桜花らんまんの春、夢と希望に胸ふくらむ春。寒かった冬の固い殻を破って万物が蘇生する春。まことに春は、この世に生を受けているものが、ひとしく生の喜びを身にしみて味わうことのできる季節である。

花み堂のお釈迦さまに、甘茶をかける花まつりは、童心に春を呼びかける仏事であり、桜花咲きみだれるご本山での御忌は、念仏全信徒に春のたけなわをつげる大会である。世間は平和そのものようであるが、日々われわれが目にし、耳にすることは必ずしもそうではない。そんなときに、うららかな春の仏事を心ゆくまで行いうることは、有難いことといわねばならない。

しかしながら、春にうかれ、花に酔っていてはいけな。刻一刻と私達に与えられた生命の時はきざまれている。仏事の中で喜び楽しんでいて、それで総てが終ったわけではない。本当の念仏信仰が私のものとして生かされ、確立しているかが常に問われねばならない。

善導大師に二河白道の教えがある。南は火の河、北は水の河にはさまれた四五寸の細い白道を、一人の行者が一途に念仏しながら西に向いて歩いて行く。弥陀如来がお招きになっている彼岸に向っての道ゆきではあるが、一歩あやまれば、火の中、水の中である。いうまでもなく水火は人の五欲のほむらであり、その中の白道を行く旅人は、一心に往生を願って念仏行にはげむ行者の姿である。このひとすじの道こそ、念仏者に与えられた道ではあるが、果してわれわれは、この道をまっしぐらに歩いているであろうか。

衣・食・住や、人間なるゆえに悩み多いこの人生において、ともするとわれわれは五欲のとりこになる。うかれた春ともなると、この私さえ見失いがちである。こんなとき、もう一度、二河白道のひとすじの道に立つ私であることを、反省したいものである。

(安居)



誕生仏 奈良東大寺蔵

宇宙の光！ 悉達多の生誕

||
— ||

今から二千五百余年前である。中印度の平原にあたって、北の方よりヒマラヤの雪山が南にその山麓を落して消えゆき、雪溶けの清流がようやくガン河の流域を生むあたり、今日のネパール、当時の迦毘羅衛城カピラヴェシヤの東方八哩の地点において、あたかも嫁いたカピラバツツの国主浄

飯王ヘンオウのもとを辞して、その孕んだ子をその親もとで生むため東に旅をする貴婦人があった。しかるに未だその生家にいたらぬ途中に産気づいたため、ほど近い花もたわに咲いたルンビニーの花園に入ってしまった。休息した。夫人はその春爛漫と咲き乱れた無憂樹の一枝を折ろうとしたとき、にわかには時みちて玉のような王子を産みおとしたのである。

—四月八日花祭に思う—

〈大本山知恩寺法主〉
東海学園女子短大学長

林 靈 法

ときまさに四月八日、その婦人の名は迦毘羅衛城主の室である摩耶夫人、そして吼々の声をあげた王子こそ、実に今日私たちがその生誕の意義を記念しようとする悉達多であつた。

王子の生誕にあたっては、先ずその瑞相を祝福せんとして、大地は大いに震動し、光明はあまねく全世界を照らし、天地宇宙はことごとく歡喜を呈して生命の大讃歌をかなでた。諸神は天上より降つてその手に太子を承け、室よりは二つの流れの温水が降つて太子のからだを洗うた。終るや悉達多は大地に立つて四方に向い、七歩を進み、右手は高く蒼穹を指し左手にて大地を指し「天上天下唯我独尊」と獅子吼したのであつた。

これは歴史と伝説の語る釈迦生誕の記録である。

悉達多生誕の事実については、後世の仏教經典はいろいろにこれを美しく語り伝えた。あたかも神の天上界より降り来りし如く、しばらく人界の姿に同化して、一切衆生を救済せんため降誕せられたものとする。そして、それに付随していろいろの人智の想像を絶した瑞相を語りつたえる。このことは洋の東西を問わず心靈界の偉人の生誕の場合には同じであつて、思慕と畏敬の念よりし

てはまことに人情自然の発露と言われるものである。

さりながら、偉人覺者と言えどもその誕生という一事実においては、人の世に日毎にくり返されてゆくまことに一平凡事たることには変りはない。悉達多はいわゆる一国の太子とは言え、当時のカピラバツツは大国のマカダヤコーサラ等の武力的紛争の間に立つて、その國際的運命もまことに安らかでなかつた一小都市にすぎなかつたのである。ローマ史家ギボンはかつてあの絢爛たりしローマの廢墟に立つて「人は去る」と哀切深長な感懷をのこしている。國破れて山河あり。悠久なる天地自然の前には、道はローマに通ずと豪語した俗界の巨人どもの試みも、あわれ一朝の夢であらう。これに比して、その生誕の事実たる、僅かに旅の道すがら路傍の一小事にすぎないにも拘らず、二千數百年後の今日、世界人類がこの意義ある聖日を追懷せざるを得ないのは、そも何のためであらうか。そは言うまでもなく、悉達多たる一嬰兒の生涯に宿された偉大にして、而も永遠に不滅なる意義においてである。そしてその永遠不滅の意義とは、実に喪身失命的な長い求道の結果到達し得た彼の成道、即ち宇宙人生の一大真理を身をもつて証し得たというところにある。

Ⅱ 二 Ⅱ

それならば、悉達多の到達し得た真理とは何であつたか。

阿含の經典はこれを説いて三法印、或は四諦十二因縁等の仏教独自の難解な言葉をもって語っているが、いま私はその内容を、無常より信愛へという極めて人生的意味を含む言葉をもって味うことが出来ようと思う。

天地自然、そして人世のすべての現象は常にうつり変りゆくものである。生あるものはうつろい、そして死する。人は生によるこび死に慟哭する。さりながらこの人界にあっては、何ものと言えども、永遠であり滅びざる実体的のものはあり得ないのである。故に、先ず無常を説く仏教が一面において悲哀の宗教という印象を与えるのは当然であらう。しかし、ひるがえってこれを宇宙人生の自他一切を真実に生かしゆく大いなる生命の立場よりすれば、その変化、その悲しみも決して単なる死でもなく、悲しみでもないのである。まさしく大生命の創造発展のほんの一瞬時における変化であり、更に光輝ある復活への一過程にすぎなかつたのである。そしてその悲しみ、その愁いも実は総合発展しゆく生命の一大讃歌と

なつて響いてくる。この一大転機にいわゆる宗教における覚り、救済という体験の秘義がひそむのである。

もともと、真の生命とは単に自然態としての生理的な連続を言うのではない。与えられた自然現象としての生命ならば、宗教的意味においては死と同一であつて、そこには何ら人生的意味はないのである。

「人もし生くること百年ならんとも、死せざる道を見ることなくば、この不滅の道を見る人の一日生くるにもおよばざるなり」

「たとえ生命のかぎり師にかしづくとも、心なきひとは真理を知らざるべし。げに匙は器につけども味を知ることなきがごとし」

と「法句経」の語る如くである。愛と智慧とのあたたかき力によって、悩み、迷い、そして人間の罪をうちに止揚しゆくものこそ真の生命力である。生命とはもともとこれらの悩み、憂い、そして死をうちにいだく悲劇的のものである。しかもこの悲劇的な傷痕を快癒してゆく復活へのあたたかい祈念を宿しているのである。だから、生命とは変転、悩み、そして死の苦痛とはなれ得ず、これらの悲劇的のものが深ければ深きほど、その快癒への生命創造の讃歌は荘厳さを倍增してゆくのである。

る。宇宙人生の最も深き奥所には、こうした人間の罪や死という悲劇的のものをあたたく快癒せしめて、新しき高次の生へ押しすすめる常住眞実の力が用意されているのである。釈迦時代のいわゆる根本仏教に説く無我とか縁起の力、或はその死後に發達した大乘仏教に説く華嚴哲学の事々無碍の世界、法華の実相哲学等、更にはこれらの宗教的表現である浄土教の本願力などというものは、いまいう宇宙意志としての生命力をさまざまな角度から説こうとしたものであった。

若き悉達多の体得したところのものは、かくてこの移り変わりゆくものの中にあつて、而も変らざる法である常住眞実の生命力であつた。そして天地一切の育成力であるこの眞実生命に想到し得てこそ、そこに始めて共同同悲の同胞信愛の眞生活に進みうる。無常より信愛へ、無常なればこそ、そこに生くる日のよろこびとして、変りゆく瞬時の生活にも力いっぱい永遠の命を味うことが出来るし、信じ愛しぬいてゆくことも出来る。

現代の若き人々には、この生命復活への大讃歌のきこえなくなつてから、すでに久しいのである。ヤスパースやサルトルなぞの実存哲学に、いつまでも暗いなくさめを求めているべきではないであらう。現代人はあまりに

個人の悩み、不安、絶望という悲劇的のものに沈潜することにあまえていゝのではないだろうか。生命の悲劇的のものより超躍して、快復への讃歌に耳を傾くべきではないだろうか。

矢張り仏教の大きな使命が求められてくるのである。華嚴経や法華経が人間的悲劇を克服しゆく生命の大讃歌であり、特に華嚴経の如きはこの宇宙人生の一大莊嚴をつたえる大交響樂として、これは読まらるべきものとしてよりも、聴かるべきものとしての神聖な書である。そしてその結構、その結論において全くこれと同じであるゲーテの「ファウスト」がまた人生航路に倒れたファウストの傷痕を快癒しゆく生命の讃歌として味わわれてよい。まれ文章そのものがすでに音楽的なひびきを伝えるロマン・ローランの「ジャン・クリストフ」が同じように復活快癒への、信仰の讃歌であることを告げておきたい。私は孤独の夕べに、失望のあしたに、いつもこれら生命の書を味うことによって、人生の悲劇の中にも光ほのかに生きることの喜びを感じしめられている。

|| 三 ||

さて、宇宙の眞実生命であるこの「法」の眞理をさと

り得た悉達多は、旬日にわたる悪魔の誘惑を斥けて「いまこの三界は皆是わが有なり、その中の衆生は悉くこれわが子なり」という絶対愛にもよおされて、決然として菩提樹のもとを起って伝道の旅に出た。以来四十数年の間、この真理の宣伝と人類教化の使命に身命を捧げたのである。

今日我々が彼の生涯を憶うのは、彼がこの宇宙の真理に到達して、それを更にひろく世界の民衆の心に伝道し実現せんとしたその熱誠その努力にあるのである。そして、三十五才遂にこの偉大なる精神的誕生に到達し得たその濫觴は、そもそも六年前の二十九才のときであった。即ち彼がそれまで世の風習に従っておくってきた平和な家庭の享楽生活に満足することを得ず、多感な青年の誠実さよりして、先ず複雑怪異な人生の矛盾に対して深刻なる疑問を投じたのである。そはやがて哀切深長なる悲哀と化し、更に思いは凝って人類全体の真に共に生きゆく光を求めしめた。遂に最愛の妻子と親愛なる肉親に訣別を告げて、一介の乞食沙門となつて道を求めるに到つたのである。

しかして、彼の生涯中最も光耀を放つところのものは、その成道の朝における彼の雄偉にして、しかも敬虔

なる姿である。

彼がはじめ沙門となつて道を難行苦行にもとむること六年、その空しきことを知って遂に尼蓮禪河のほとりに来つて身心の保養をとり、心あらたに菩提樹下のもとに坐して最後の思念をこらした。このときの彼の決心たるや、実に悲壮なるものがあつたであらう。そしてこの決心は時到了て遂に報いられた。坐ること数日、遂に十二月八日の未明である。

暁の明星東の空に明滅し、千古の神秘を宿すヒマラヤの皚々たる白雪漸くほのかにその雄姿を紺青の空にあらわし、鬱々たりし四囲の樹木また寂靜の黑暗より息吹きを回復しようとする頃である。天と地とが一体になつたこの大生命の中に溶け入つた彼悉達多の心境に、いまや一道の光がほのかにおとずれてきたのである。即ち、彼は菩提樹のもとにあつて宇宙の真理たる「法」の生命に到達し得たのである。阿含經の伝うるところによれば、このとき悉達多は菩提樹のもとを立つて「南無仏」と合掌したのである。

この雄偉にして敬虔なる合掌の彼の姿を瞑想しよう。いまや彼は中印度の釈迦族の一王子悉達多たることを越えて、宇宙真理の覺者（仏陀）即ち如来として起つたの

である。彼の人格上の權威と光とはすべてここより生れる。彼は自らさとした真理を伝えるため菩提樹下のもとを立て先ずベナレスの鹿野園にいたり伝道の第一声をあげているが、このとき彼を迎えたのはかつて彼の従者であつた五人の比丘であつた。難行苦行をすてた悉達多を墮落したものと考え、侮蔑の心より彼に挨拶せざることを約束したのは彼等であつた。しかるにいま光輝増せる悉達多の容貌を見て、かれらは思わず「わが友よ」と呼んだのである。そのとき悉達多たる彼は答えている。「汝ら如来を呼ぶに名をもつてし、「友」の語をもつてすべからず。比丘らよ、如来は覺者なり。汝ら耳を傾けよ、われは不滅の道を得たり」と。それについて諄々と仏教の真理を説きすすめている。実にこのとき彼は昔の友悉達多としてではなく、真理をさとれる覺者としての權威をもつて立つたのである。彼はいまや国と人權とを超えて真理の人格的權化として誕生したのである。

「南無仏」と合掌せる悉達多の尊嚴崇高なる至禱！

彼は自らの身心の中に生き、只今の自己を真にめざめしめてゆく天地無量の大恩力、即ち「法」である大生命に先ず自らが帰依合掌したのである。彼は従来の地上と縁なき天国の神々を否定して地の意義を求めた。仏教が

無神論であることはこの限りにおいて言い得られる。だが無神論者たりし彼はしかながらこの自己の中に実現し来れる天地の大御力に自覺想到し、そこに眞實の自己を見出し、この大主觀たる眞の自己に帰投し合掌したのである。「天上天下唯我獨尊」なる誕生偈は、いわゆる功利的な個人主義を立場としての個我を最上のものとして宣言したのではない。煩惱欲望の生み出した個我を否定し、本当の自己である天地の大生命に到達した自己こそ最も尊きことを表白したものである。

生誕と同時に起つて七歩を歩めりとは六歩を越えることで、仏教では迷いの世界を六趣となしている。即ちこの世界は生死に悩み、因果必然にもまれゆく不自由の境界である。この悩みの世界を越えてゆく自由の境地を七歩と象徴したもので、「天上天下唯我獨尊」と立ちあがった誕生仏の姿は、この自由なる人格的自主獨立の象徴を物語っている。天上の神に逃避することによつては、人間の尊さ、地の意義は見失われる。さりとてまた近代の功利的なる個人主義や人間主義の中にも、人間存在の眞の意義は見失われる。大地をふまえて天地自然の大生命に自覺想到した自己こそ、真人たる覺者たりうる。仏教とは地の意義を説く人間の宗教であつたのである。

上野 馨 雄

(総本山知恩院布教師会長)

二つの御遺訓

=御忌を迎えて=



桜の花の咲き初める頃になりますと、私は幼少の頃から御忌(ぎょき)の御法事がつとめられるのを、楽しみにしておりました。

御本堂の正面の宗祖法然上人の御尊像をおまつりして、十種供養の品々を奏楽の音とともに、静かに出勤のご寺院がお手ぐりしてお供えされる厳粛、華麗な法要を拝んでいたからであります。

法然上人が八十才の御生涯を終えられたのが、建暦二年正

月二十五日であります。今から七五〇年ほど前のことではありますが、私達お念仏を心の糧かたとして、生活しておりますものは、このお日柄にあたって、上人の恩徳を讃仰して、その慈恩に報謝するために、御忌法要がつとめられております。

これは「大永の鳳詔」により全国の浄土宗の寺院に御忌法要が、つとめられるようになりました。

四五〇年前の大永四年一月十八日、後柏原天皇より知恩院第二十五代超譽存牛大僧正に毎年正月に、一七日の御忌法要をつとめよ、との勅命によったものであります。

しかし時代は変りまして、明治十年より四月の桜花の咲き乱れる頃に、つとめられることになりました。

× × ×

御忌(ぎょき)という言葉は、天皇の御法事の場合だけ使用される言葉であります。皇后の場合は御忌(おんき)と呼ばれております。親鸞さまは「報恩講」、日蓮さまは「お会式」、道元さまは「ご征忌」と呼ばれております。各宗祖師の中で、ただ一人法然上人だけが、天皇様と同様に御忌と呼ばれております。

法然上人の御徳をたたえるために、おかくれになってから約百年後に、勅命によって舜昌法印(後に知恩院第九代門主)が上人の行状絵伝を編集され、天皇、上皇が自から筆をとつ

て、上人を讃仰され能書の公卿達が文章をかき、土佐一門の絵師たちが心血をそそいで絵をかきあげたのが、名高い勅修御伝であります。四十八巻ありますので四十八巻伝とも申しまして、国宝となっております。

また上人が宗教家として、日本人の思想面に偉大な功績をのこされたため、朝廷より大師号宣下が七回もありました。特に昭和三十七年の七五〇年目の御忌法要には、天皇より和順大師と宣下されたのは、日本の戦後初めてのことであります。

これらのことを考えますと、法然上人は私達日本人の日常生活において、偉大な教を残された、宗教史上まれに見るお徳の高いお方であります。

× × ×

建暦元年十一月十七日御流罪を許されて、五年ぶりに京都東山の吉水の禪房にお帰りになりました。

しかし吉水の禪房は荒れはてておりましたので、慈鎮和師が特に法然上人を大谷の禪房に迎えられたのです。翌年の正月二日より上人は発病されたため、高弟の法蓮房信空が心配のあまり、翌日上人におたずねされたのです。

「昔から各宗祖師方は立派なご遺跡があります。しかし師の御房には、吉水の禪房はすでになくなり、あとかたもあり

ません。この大谷の禪房も粗末な庵室でございます。御入滅ののちは、いづくをもつて御遺跡といたしましょうか」とお伺いされたのです。

その時上人は、

「私は四十三才で浄土宗を開いて、今八十才で、お浄土に帰える身である。三十八年間念仏を唱え、また人にもすすめてきた身である。私の遺跡とは念仏の声するところ、どこでもこの法然の遺跡である」と教えられたのであります。

× × ×

私達が上人の伝記、御法語を拝読いたしておりますと、実に驚くような言葉があつて身にしむ思がして、いまさらながら偉大な宗教家であると痛感いたします。

たとえば、日本人の中で「私は愚痴の凡夫」だと堂々と申されたのは、法然上人が初めてであります。人間は誰れでも、自分というものは賢く、偉らく見せたく、また見てもらいたい心があります。それは昔も今もこの名誉欲は、世界の人々がもっている。共通のものであります。

上人は「春風接人、秋霜持己」のお方でありました。この風格は藤原隆信朝臣が、後白河法皇の勅命によってかかれた上人の御真影に、はっきりでております。上人のお顔は温容玉の如きもので、人々に接するときには慈悲の春風の如くで

あり、自分のことは秋霜烈日の如く、深く懺悔の生活をされたのです。

そして阿弥陀仏の本願である、お念仏を唱えることにより、自分も一切の人々も、ともに救われる教を選択されたとき、誰れははかることなく「私は罪惡深重の凡夫だ」と宣言されたのであります。

法蓮房信空に、念仏の声するところ、我が遺跡であると、教訓されたこのお言葉も世界宗教史上、まれに見る金句であります。

このように上人の八十年間に、自から話をされ、また弟子達や信者の人々に教えられた数多の玉辞は、八百年後の私達の処世の導きの言葉として、生きつづけております。

× × ×

私は昭和二十年の晩春に、三回目の召集をうけて朝鮮の南端にある済州島に派遣されました。この島は四国の香川県ぐらゐの面積で、島の中央にカンナ山という大きな山があり、その山麓が海岸までひろがっております。この島の守備のために陸海軍の大部隊が陣地を構築していた時でありました。私達の部隊が移動して任地についた夏の頃旅団副官の私の粗末な堀立小屋に入りましたとき、部屋の片隅に一冊の古い雑誌が置いてありました。

私は何気なくひろいあげますと「浄土」という、なつかしい法然上人讃仰会から発行されている月刊雑誌でありました。これは前線将兵の慰問袋に入れて内地から送られたもので、前任の部隊の人が読みすてておいたものであります。

私はなつかしい思いで、この古い汚れた雑誌を、多忙な軍務の余暇のなかから幾度も、読みつづけました。

その当時の済州島は敵の潜水艦にとりかこまれ、朝鮮本土とは完全に遮断され、私達は草の根を堀って食事をつづけていた時でありました。井戸を堀っても、海水が湧き出るため雨の日には、天水をドラム缶かにためて、飲み水にしておりました。

敵の潜水艦は、暗夜に艦砲射撃で弾薬庫を爆破して、毎夜もの凄いい火柱が立ちのぼり、敗戦直前の時でした。島の将兵は自分の死が直前にせまっていることを感じていました。

その生死の対決を前にして、この有難い雑誌「浄土」は私の救いの聖典でありました。

法然上人が「念仏の声するところ我が遺跡である」と教訓されたお言葉は、明日わが生命の存続も判らない戦地において、私に尊いお念仏を自然に唱えさせる、強いお力がありました。

戦場という修羅のちまたには、鬼気せまる地獄の世界であ

ります。この修羅場に一冊の「浄土」の雑誌をとおして、法然上人のお念仏が、よみがえってきました。そして念仏申すことによって、法然上人のおられるお浄土に導かれるという強い安心が得られたのです。

南無阿弥陀仏と申すことによって、修羅の戦場が宗祖の御遺訓の浄土と変っていくことが、如何に有難いご遺訓であるかを、身をもって体験いたしました。

地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道を、たえず輪廻している私達は、お念仏の大願強力によって、済度されるものであると私は、かたく信ずるものでございます。

x x x

法然上人が御臨終の二日前の、正月二十三日に愛弟子勢観房源智に遺訓された、一枚起請文の中に「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」と申されております。

この一句は現代人の驕慢心や傲慢な態度に流れがちな、一部の人々に徹底的な痛棒を与えられております。

「折伏」という名のもとで、他人を説得せんとすることは、実に危険なことであり、折伏という真の意味の判らない人々です。

折伏とは、自分の心の中にある三毒煩惱を打ちくたくことであります。私達の日常生活を、静かに反省いたしますと、

欲ばり、怒りわめき、そして愚痴の三毒煩惱のために、三悪道の日暮しであります。

自分が愚鈍の身であることを自覚することもできず、懺悔の心も起らないものが、どうして真の折伏ができませんよう。仏教の信仰入門の第一は、まず懺悔の生活であります。

法然上人の申された智者とは、智慧のある人のことです。まじりけのない、すみきつた、濁り気のない無漏の智慧であります。

世間で言う知識ではありません。物識りの学問でなく、懺悔し、発心して四弘誓願の仏道修行して、初めて人を折伏できるのです。

法然上人の八十年の御生涯を終えられる直前に、二人の弟子に遺訓された「念仏の声するところ我が遺跡である」という言葉と「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」と申された、この二つの玉辞は深い関連があります。それは念仏申すことによって、私達が如何なる困難なことに遭遇しても安心して、力強く生き抜くことができる、お教え下さったものと、私は信じております。

そのため浄土宗の寺院で、御忌法要をつとめますときは、必ず御遺訓の一枚起請文を声高らかに拝読して、上人の慈恩感謝の誠を捧げるのでございます。



津軽の聖者

|| 貞伝上人の教化 ||

浄土門主 岸 信 宏

私は昭和四十一年の六月十日から二十八日まで青森県下の十六ヶ寺を巡錫した。宗祖法然上人の門下の偉材であったと金光上人の七百五十年の法要を東北六教区主催のもとで浪岡西光院の墓地で行い、次いで上人の遺跡寺院を中心にして、県下北部に散在する十六ヶ寺を巡錫して、それぞれの寺で記念行事を行なったのである。そのうち東津軽郡平館（たいらだて）村今別（いまべつ）の本覚寺には六月十八日におもむき、開山草薺安長上人の三百回忌法要を修し、引き続き剃度式を行なった。受者三百名程であった。

今別は津軽半島の先端近くにある良港として昔より栄えたところである。昔は蝦夷（えぞ）、今の北海道へ渡る船はこの今別の港で日和（ひより）を見定めた上、津軽海峡を横断して彼の地へ渡ったそうである。今は鉄道の便により、青森から函館に渡る青函連絡船により、交通の便がそちらに奪われ

て、今別は昔のような繁栄は見られないのである。しかし私は前日青森市から今別まで一時間半程を要してついたのであるが、こんな僻遠の地に、こんなに賑やかなる港町のあるのを見て驚いたのである。目下、本土と北海道とを結ぶ国鉄の海底トンネルが、今別から五里程の道程にある津軽半島の先端竜飛崎（たつびざき）から堀り進められているから、この津軽半島を縦貫している津軽線が本線となって、北海道へ通ずることとなる。今別も交通の要衝として昔の繁栄を取りもどすことになるかも知れない。

今別の本覚寺は青森県下の四本丈地の一つである。他の三ヶ寺は弘前の貞昌寺と誓願寺、鯉ヶ沢（あじがさわ）の法王寺とである。本覚寺の草創は平安朝末期の天元年中とせられる。降って徳川初期の慶安三年には羽州湯殿山の支配のもとに、法竜山延命寺吉祥院と称したのであるが、次いで明暦四



＝貞伝上人のお墓ともなっている蓮華勝会塔＝

年に磐城の専称寺から単誉安長上人が入寺せられ、浄土宗名越派の寺院となり、安長上人をもって当寺の開山としてゐる。

第五世に良船貞伝上人という方が出られた。この貞伝上人は熱心なる念仏行者であつて、その創意になる三遍返しさんぺんがしの念仏というのが今に伝えられている。大波・中波・小波の打ち返す波の音律をとらえたものといわれる。貞伝上人は又土地の人々に農業・漁業・林業等の産業を指導し、殊に昆布の養殖を盛んならしめ、土地の人々は今に上人に対して深い恩恵を感謝しているのである。当寺の中興開山と仰がれている。

上人は赤ん坊の時、当寺の門前に錦の袋に包まれて捨てられてあつたので、十歳になるまで門前の家で養われ、その上本覚寺に入寺せられたと伝えられている。おそらく京都の高貴なる人が蝦夷におもむく途中、今別に滞在していられた時の落胤ではなからうかと思われている。

貞伝上人の庶民教化の事蹟を伝える書物に『貞伝上人東域念仏利益伝』上下二巻がある。貞伝上人の弟子良愚忍秀上人が先師の七回忌供養のために、京都獅谷の宝州上人に依頼して、元文二年に出版せられたのである。清浄華院四十九世の嚴誉秋白上人がこれに序文を書いていられる。上下二巻ともに五十八項をあげ、通算百二十六項目にわたって貞伝上人の

庶民教化の実例が記されてある。

この中にあっても、今日境内に残っている金銅蓮華勝会塔の建立のことは、上人の念仏教化のあとをしのぶに最もふさわしいのである。その版画が巻頭にのせられてある。貞伝上人は享保十一年正月にこの塔の建立を発願せられたのである。上人が日課念仏を授与せられた弟子は道俗合わせて六万余名に及んだ。その中には念仏相続退転の人もあるから、日課授与の人々の名前をこの塔の中に納めて置き、この塔を朝夕供養して香華をたやさなければ、念仏退転の人もこの塔を拝するならば、懺悔して念仏を相続するであろうと考えられて、この塔の建立を発願せられたのである。人々は喜んで所持の古銅器類を寄進し、その量七百貫にも及んだのである。そこで出羽国の鑄工北原氏に命じ、高さ一丈の金銅の塔婆の鑄造を依頼し、翌十二年五月に完成し、同年六月二十三日から七月二日まで十日間、慶讃供養の大法要が行われたのである。千部の阿弥陀経読誦、流灌頂（ながれかんじょう）等が行われ、結縁の群参前代未聞、諸人種々の奇瑞を感見したことがいい伝えられている。

蓮華勝会とは阿弥陀仏の浄土をさすのである。正面には南無阿弥陀仏の御名号が大書せられ、この傍らに、

斯願若剋果 大千応感動

虚空諸天人 当雨珍妙華

の偈文と二夫人の像が上部に、左右に七化仏の像と散華とが描かれてある。右面には阿弥陀経の全文、右面には蓮華勝会の大字と、この下に上人の発願文、後面には中央に大書の名号とその左右に小書の多数の名号が左文字で書かれてある。これを摺字する人の便を計ったものである。いずれも貞伝上人の真筆である。

右の蓮華勝会塔鑄造に余分の地金ができたので、貞伝上人は弘前の鑄工高屋氏に御たけ一寸二分の阿弥陀仏の像一万体の鑄造を依頼し、享保十五年一月に完成したので、上人は七日間別時念仏を修してその開眼法要を修し、有縁の方々に頒ち与えたのである。私もその一体を今回頂くことができた。

貞伝上人は多くの人々の帰依を受けられ、多くの人々に奇跡に等しい種々の私益を与えられたが、自分の死期の近きを知り、自ら建てられた蓮華勝会の塔の下に洞窟を掘って、七日間念仏して、そのまま往生の素懷を遂げられたと伝えられている。時に享保十六年四月十日、世寿四十二歳であった。

天明年間に本覚寺の第十三世となられた良序愍栄上人も庶民の教化につとめられ、大いなる感化を今に残していられる。貞伝上人と同じく、植林に意を用い、魚族の繁殖を指導し、地域の産業に貢献せられるところが多かった。津軽半島

のヒバ林は、木曾のヒノキ、秋田のスギと共に日本三大美林に数えられている。特に津軽半島のヒバは耐久性の強い建築材として重宝がられ、伊勢神宮の用材としても出荷せられるそうである。貞伝・惣栄両上人の林業に対する貢献を忘れてはならないであろう。

貞伝・惣栄両上人の教化のため、四年目ごとに授戒会と五重相伝会とが交互に行われ、授戒を受けた人が次回に五重相伝を受けることになっており、受者は全員門外不出で、厳格に行われているとのことである。また十年目ごとに貞伝上人の法要が行われているのである。昭和四十四年は貞伝上人の二百四十年忌にあたり、惣栄上人の百七十年忌にも相当しているもので、私に親修してほしいとのことであった。

そこで昭和四十四年九月六日に再び今別におもむき、貞伝上人の二百四十年忌と惣栄上人の百七十年忌の法要を翌七日に親修した。十年目毎に行われるこの法要には他郷に出ている人も実家に帰り、町をあげての法要となるという。随喜寺院も十名程あり、参詣者も約三百人程あった。法要は九月五日から八日まで四日間行われる。昔は七日間つとめられたとのことである。

本覚寺の座敷の裏庭は杉の巨木にかこまれている。その木立の中に、九月というのに紫陽花（あじさい）が一株咲いて

いるのが印象的であった。この津軽半島先端附近の山野には自然生の紫陽花が多いとのことである。近畿地方では初夏の候に開花するこの紫陽花を津軽の地の初秋の季に老杉の木立の中に見るのも、それだけ近畿地方とは気候のずれがあるのであらうか。

九月八日朝九時頃、本覚寺を辞し、帰山の途についた。本日は法要の結願日である。本堂の前に小舟が造られ、その中に法要中修した施餓鬼会の塔婆が積まれ、又小石が沢山つまれてある。これを海上に曳いて出て、海中に投ずるのである。塔婆は流灌頂の意味であり、投石は昆布の繁殖と漁場造りの意味である。昔は大きな石を海中に投じたそうである。流灌頂も投石も貞伝上人が初められたのである。

貞伝のひじりのみあと今になほしたはれのこる今別のさと

貞伝のひじりのはじめたまひたる三遍返しの念仏たうと

不夜城の町とも見ゆる陸奥湾の沖にかがやくいざり火の列

初秋の杉の木立の下かげに紫陽花のさくみちのくの寺

痛いところを叩かれた創価学会

最近、藤原弘達氏著「創価学会を斬る」をめぐって、創価学会の本性が暴露された一事については、新聞やテレビで騒ぎ立てていることとて、読者も充分承知のことであろう。隆々と榮えに榮えていた創価学会が、これ程に手痛い打撃を受けたことは、近来にない出来事であろう。特に衆議院の議席を倍増し、勝ち誇っていた時だけに、その受けた打撃によるショックは大きい筈である。その慌てぶりには、竹入委員長が「事実無根」と記者団に発表した矢先に、矢野書記長がその事実を認め、大いに反省していると陳謝している事実からも見られる。又公明党と創価学会を分離した組織替えに、躍起となっている様子から

も、その一端をうかがい見ることができる。事の起りはいうまでもなく藤原氏の著書出版に対して、あらゆる手段を構じて妨害し、断圧してきた事であって、藤原氏はこれこそ言論の自由を無視するものであり、これこそ「民主主義の敵である」「自由な言論の敵である」として断乎立ちあがり、あの手この手のからめ手を振り切って出版を強行すると共に、明大教授の肩書きを振り捨てて、言論の自由を守る為、闘う決意を示したことに、問題の焦点があるのである。しかし、こうした事實は、藤原氏の著書に始まった事でなく、社会的には余り問題にされなかったが、内藤国夫氏の「公明党の素顔」という著書の時も

あったようで、その脅迫に氏はノイローゼになった程であった。身近な所では、浄土誌友の竹中信常先生が「創価学会」という著書を分された時も、印刷のゲラ刷りを真赤にする程手を入れて干渉してきた程で、先生も又これを断乎振り切って出版を強行されている。一体、こうした手口は、創価学会の最も特技とするところであると共に、それ故にこそその動向と将来に、識者はいつも危惧したのであって、今更事新らしく取りあげるまでもない事である。ただこうした事実があり、又そうした危惧がありながら、一向にそれが問題とされず、又どうする事も出来なかったというのが現実であった。たまたま藤原氏とい



うその道の太物が、真正面からその問題に取り組まざるを得なくなった為、これが社会問題化し、又彼等に大きな打撃を与える事になったものであつて、この点われわれも大いに反省し、又一面ではもつとこうした事について関心を持たねばならぬのである。

大体、創価学会が如何程にファッシヨ的性格を持つものであるか、どんな野望をもつて民衆をたぶらかし、躍らせているかについては、しばしば指摘してきたことである。特に信教の自由の問題については、当初は、あらゆる他宗教は邪教として、この撲滅こそ最も肝要な目的であると広言しながら、社会の批判が出てくると、次第に、信教の自由を尊重するかのとき表現に切り換え、たとえ政権を取ったとしても、日蓮正宗を国教とする様なことはしないと云っているのである。しかし、猫の目の様に適当に変化する彼等の言い分など信用の出来るものでない事は、いろいろな事例で明らかである。特に信教の自由について、そう言いながらも、相変らず他の宗

教は邪教として、自己の信仰のみは最高最善とする独善的なドグマは、やがて、それが権力的にも実行出来る段階になって来た時、何時なんどき、君子豹変して、言論の自由を断圧し、信教の自由束縛してこないとも限らぬのである。その顯著な事例が、今ここにできたのであつて、たかがこれ程の権力でありながら、已にこれだけの弾圧をしてきたという事になれば、これから先、はかり知れない危険がそこにあるといつてよいであらう。

今、彼等はこうした批判をそらすため、公明党の役職員が創価学会の役職を離れると共に、公明党の組織替えをし、政教分離をしようとしている。しかし、果してこれがどれ程まで本気なのか、ほんの見せかけなのかは、実はこれからの事ではあるが、従来の事実から推測して、これをそのままにも受け取ることは、とてもできない。元来、公明党が今日あれ程に政権を拡充したのは創価学会あつての事であつて、これを切り離してはその存立は不可能であると言つてよい。従つて、

分離すると言つても形式的な事であつて、分離し切れるものでなく、公明党がより以上発展するためには、公明党独自の力では駄目で学会の発展を待つ以外にない。それは折伏以外にない。折伏の第一主張は邪教の撲滅であるから、相変らず信教の自由は犯されていくことになる。仮面をかぶつた彼等を、われわれは直視しなければならぬ理由がここにある。

しかし、われわれとても反省しなければならぬ。こうした彼等をここまで独走させた事であり、そうした事実がありながら、余りこれを問題にしなかつたという事である。マスコミさえも何か臭いものにふたをするような所があり、政治家に至つては票田欲しさに何もいわないと言つた有様である。これでは彼等が勝手に横行するのは当り前である。これと真正面から対敵するわれわれこそ、この事について真剣に考えねばなるまい。今からでも遅くない。われわれは、彼等の実態の何であるかを見極め、これに対しては勇猛心をもつて鉄槌を下さねばなるまい。

(安居)

「小消息」の御法語に学ぶ（四）

五、ありがたきえにしを悦ぶ

受けがたき人身をうけて、あひがたき本願にあひて、おこしがたき道心を発して、離（れ）がたき輪廻の里をはなれて、生（れ）がたき浄土に往生（せ）ん事、（悦）びの中よろこびなり。

念仏者として決定往生の身となったありがたき、得がたいえにしを無上のよろこびとされた一段である。このよろこびは、人身受けがたく、本願遇いがたく、道心おこしがでたく、輪廻はなれがたく、浄土生れがたき、これで五つのありがたきものを超えて、道縁をそなえ得た感激である。私どもは先ず第一に「受けがたき人身をう



—大正大学教授—

小 沢 勇 貫

けた」こと、人間に生れたことのありがたさを知らなければならぬ。地上の生物はみなほんのうと業によって、六道などといわれるまよいの世界に、生れかわり死にかわり果てしなくめぐっている。その中で人間に生れけことは、前の世で善業を積んだ果報として得られたのだ。また諸仏の出世したもうはただ人間界のみにあると説かれる。これはインド以来の信仰的な考えであるが、このような気持にはまた非常に深いものがあると思われる。この世界に生を受けるとは難く、雑阿含など諸経論には、盲亀浮木にたとえて説かれる。大海に住むめくらの亀が百年に一度頭を出し、海上にただよう浮木の一つしかない孔に出あうようなもので、きわめて稀れな出あいであることをいうのである。しかし今すでに人間に

生を受けたことはよろこびであり、また人間として生れて仏のみ法を聞くことは更にありがたいこととされる。言うまでもなくここには人間の生命を尊重することをおしえ、そうしてまた人間の生き甲斐は正法を聞くことにあるをおしえているのである。

幾億万の人びとが地上に生を受けて、しかしながら本當に生き甲斐を感じ人生のとうとさを知るものが、果してどれだけ居るのであろうか。元久元年上人が叡山へ送られた書状『登山状』に「ここにわれらいかなる宿縁にこたへ、いかなる善業によりてか仏法流布の時にむまれて、生死解脱の道をきく事を得たる。しかるを今あひがたくしてあふ事を得たり。いたづらに明し暮してやみなんこそ悲しけれ」と述べておられるが、醉生夢死するともがらがむしろはなはだ多いのではないか。仏教がひろくアジアの地に伝わったことについても、四世紀のむかし經典を求めて遠くインドに旅行した法顕ら求法僧の、今日においては想像を絶する苦辛を、私どもはいつも想うことであるが、長い歴史を通して多くの先徳の不惜身命努力が積まれたのであるが、遇いがたき仏法に遇い、しかも正法を聞くことができた身の仕合せありがたい、しみじみ感ずることである。

私どもは遇いがたい仏法にあうことができて、その上にわけても阿弥陀仏の本願に遇うことができたのは、なお大きなよろこびでなければならぬ。ゆえに第二に「あひがたき本願にあひて」と示される。無量寿經にも仏のみ名を聞き、本願念仏の法に遇うはありがたいこととされる。浄土の經典は古くからインドや中国にも伝えられて年久しいものがあつた。しかも凡夫を救うおしえとして本願の深意をあらわされたのは、歴史上唐代に出られた善導大師によることであつた。更に大師のご精神は五百年の後日本の法然上人によって伝承された。ながい歴史の歩みと偉大な天才を待つて私どもへの福音となつたわけである。『十六門記』には上人が大師の『觀經疏』の文にふかく感銘して専修念仏に帰せられたときの光景を叙して「称名の一行をこそ阿弥陀如来がかねて私ども凡夫のために定めておかれたと高声に念仏し、私のみ心に徹して上人はよろこびに全身がふるい、両眼には涙があふれた」と書かれてある。求道の志が大であれば本願に遇う喜びもまた大であつたに相違ない。

次にまた私どもは本願に遇う仕合せをいだいでも、本願他力の念仏を信受し身に行ずるのでなかつたならば、往生の縁を欠くことになる。ゆえに第三に「おこしがた

き道心を発して」と述べておられる。月がけのお歌にも示されているように、月の光りは皎々と野にも山にもいたらぬ里なく照しかがやいているけれども、光りの中にある自分に気づく人の心にのみ、さやかに澄むのである。大悲のみ光りも十方世界あまなく照さぬところはないが、それにふれる人とふれない人がある。うけこむ用意があつてこそ大悲のかがやきが徹到するのである。ここにいう「道心」は適切には三心を指すものと見てよい。信心の内容を至誠心、深心、回向発願心の三として説く場合のそれで、すなわち本願にしたがうすなおな心、深く信ずる心、浄土をねがう心をいうのである。なかならずこの御法語が深心をくわしく示されたものであることは前にも述べた通りである。無量寿経に「もしこの経を聞いて信樂し受持するは難く、この難きに過ぐるものなし」となる。今この難をも超えて信受する心をおこし得たことは、また大きなよろこびである。

第四に「離れがたき輪廻の里をはなれ」といわれる。前にもいうように遠い過去世から転々と生死のまよいの世界をめぐり来つたとされ、これを離れることははなはだ難しとされる。この世をシャバ世界として苦惱多いことを感じながらも、住みなじんだ旧里はなかなか離れが

たいものがある。『歎異抄』に出る親鸞と唯円師弟の對話の中にも「生れかわり死にかわり迷つて来た苦惱の旧里はすてがたく、まだ一度も生れたことのない浄土は恋しくあこがれる気持がおこらない。よくよくわれわれのぼんのうは根づよいことよ」と語られている。決定の信を是非とも得なくてはならない。

第五に「むまれがたき浄土に往生せん事悦の中のよろこびなり」と結ばれている。私ども凡夫がぼんのうの姿のままに、阿弥陀さまの極樂浄土に生れるということ、それが經典に説かれながら天台・法相ほうさうなど諸宗の教義ではまったく認めていない、本願成就の眞実の浄土は、報土といつて高次の仏国とされ、ぼんのうをすべて滅しくした聖者でなくては、往生し得ないというのが一般の教義論であつた。これがために浄土往生の信仰は久しくその面目をあらわし得なかつたのである。上人が浄土宗を立てられた本意は、実に凡夫が報土に生れることをあらわすためであつた。このことは『一期物語』に見えるお言葉にもっとも明瞭であり、善導大師の説にその教義上実践上のよりどころを得られたのである。ぼんのう具足の凡夫がその姿を改めずに、強大な本願のお方に引き立てられて報土に生れる。まことに人間の知性では思い

議りがたいこと、土人は「本願不思議」と言っておられる。生れがたき浄土に往生することもつとも大きな悦びでなくてはならぬ。「悦の中よろこび」とは以上のよ
うな衆縁がそなわったこと、無上のよろこびとして、す
べて結ばれたのである。

六、慎みとはげみ

罪は十惡五逆のものも生ずると信じて、少罪をもをか
さじと思ふべし。罪人なをむまる況や善人をや。

初めは機の深信を説かれた中に「罪人なりとても疑ふ
べからず」、「わが身わろしとても疑ふべからず」とし、
また西方極樂をえらぶは「十惡五逆の衆生の生るる故な
り」と述べられ、今は「少罪をもをかさじ」と心がける
よう誠められ、また「況や善人をや」と示される。すで
に前にも説くところあったごとく、み仏の大悲は心の善
惡、罪の浅深もへだてるところではない。已造罪のもの
があればなお攝取のみ手をのべて捨てたもうことがな
い。無緣絶対の大悲にましますことを感ずれば、なおさ
ら少罪をも犯さぬように心がけるのが、大悲にこたえる
ゆえんである。悪いと気づいたら自ら誠めるのが正しい
姿である。愚惡の身なのであるが、つつしみを忘れては

ならない。『十二箇条問答』にも「惡人をもすて給はぬ
本願ときかんに、まして善人をばいかばかりかよろこ
び給はんと思ふべきや」とお示しがある。ただ人間の弱
さ、ともすれば少罪は罪とも考えずに自らゆるし、ある
いは犯さずにすまされず犯しがちでもある。「少罪をも
をかさじと思ふ」といっても、自らがかように善人にな
ったから、往生ができるのではない。ここは誤ら
れてはならない。

『歎異抄』に「善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡
人をや」とあるもの、いまの御法語とは正反對で、とく
に知識人の関心をあつめる言葉であるが、醍醐本『法然
上人伝記』には同様の御法語があつて「口伝これあり」
と記されている。決して親鸞聖人が師の上人と対立する
説をなされたのではなく、いずれも上人のお言葉を伝え
ているのであろう。大悲救済のみ心からすれば、善導大
師もいわれるように岸上の人はおいても水に溺れたもの
こそ急に救わねばならない。椎尾法主は上人のお言葉は
多く円満なすじ道を立てておられるから、矛盾したよう
なお言葉も出る。「罪人なをむまる況や善人をや」は法性
の正態であり、「いはんや惡人をや」は摂化の大悲である
とされている。



お念仏のご利益について

西村 大岩

—東京三田・長松寺住職—

持名鈔（存覚撰）には、「三部經には後生の利益ばかりを説いているが、他の經には現世利益が説いてある」と述べてあるが、浄土系統の宗派は浄土三部經を主として用いていますので従ってその説く処も限定され往生浄土と云うことにのみ主力を注いで現世に於ける人間的な望みに対する希求を第二次的に見がちでありますが、これは吾々が過去求遠の昔より善悪業報に随って生滅流転して来た最大の原因は総てが欲望と云うものの働かせ方を誤ったが為に無量の罪を造り、その結果として今も現に苦悩の世界に沈溺し、未来も亦

同じし苦みを受けねばならないし、而も此の欲望は到底自分の力で浄化し善化することの出来難いとの自覚により、限りなき流転の苦しみを思ひて直ちに浄土への往生を目標として進むことを示されたものであるが、だからと云ってその外の世間的な望みは悉く捨てよと云うのではない。ただ一日一日の生活の連続がそのまま浄土への道に通じて居ればよいのである。この浄土への道を歩むことが仏のみ心に契かなう所以であり、仏のみ心に契うには救う者と救われる者との本願を確認し、その本願たるお念仏を常に称えて行けばよいので

ある。このお念仏によって仏様と私達が親子の因縁に結ばれ、日々親様の光明に照らされ限りなき御慈悲の中にお育てとお導びきを戴きつつ生活するのが本意であります。さて人の世の親として我が子の幸福を願わぬ者があるうか。仏様が親となって私達にお与え下さる浄土往生と云う徳は実に百千万劫にも得難い大利益で私達の進むことの出来る唯一の救いの道であり無上の喜びではあります。それが、それは人生の終りにあることで、それ迄に至る苦難の人生にも亦、能えらるる限りなき幸福のあることを知らねばなりません。

仏様は私達の心の親となり下されて育て導きお救い下さるのでありますから現実の刹那々々にもお守り下されて、いろいろな悩みや苦しみを救い、又その希望をも充たしめたいのが親心であります。阿弥陀仏の慈悲は拔苦与楽と云って苦しみを抜き樂しみを与えてお育て下され、邪惡の念を捨て善行を願う誤りなき心と菩提を求むる正しき智慧を与えてお導びき下され、又生死輪廻の迷いの世界を離れて常樂涅槃の世界に救い取って下さるのが大悲の誓願であり親心であります。

それから請觀音經の中に、或る年、毘舍離国（中印度にあった国名）に恐るべき惡病が流行し、目から血が滲み、耳から膿が出て、鼻からも血が流れ、舌根がすくんで物が云えず、どんな食物をたべてもみんな毒となつて食腸すると云う有様で多くの人達が非常に悩み苦しみました。当時耆婆と云う後世までも大医王と尊崇される名医があつて医療の秘術を尽されましたが一向に効能がありません。

この有様を見た月蓋長者が一族の者達を引き

連れてお釈迦様の許に詣でて救いを求めました。するとお釈迦様は、医術も藥効も及ばぬ惡疫は阿弥陀仏の不思議なお力を頼むより外に道なきことを示され大慈悲心を起して西方阿弥陀仏を至心に念じて焼香散花してお念仏せよと教えられたので月蓋長者は一族の者と共にお釈迦様の教えに従つて一心に西方に向つてお念仏を称えられますと、忽ちにして阿弥陀仏は大光明を放つて觀音、勢至の二菩薩を従えて來現せられ、病苦は悉く消滅して病者はすべて元の通りに平癒したと、阿弥陀仏の不思議な利益、お念仏による靈感が説かれてある。このお經は詳しくは「請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼經」と云つて惡病や毒害を念仏の力で消伏することを説かれたものであります。その他、觀音さまの事については、阿弥陀仏の脇侍としその本体たる阿弥陀仏の濟度を援けられお念仏の行者を守り利益を授け給うことが数多く種々のお經に説かれてあります。

烏瑟膩沙最勝總持經と云うお經には阿弥陀

如来が十方一切衆生の疾病、苦惱、短命等を哀みてその利益を施こし、七難消滅七福即生の徳を授け、無病安樂、得無量財と云つて一切の病災難を除き、短命夭折の不幸を救い無量の財宝と幸福を得せしむることを説かれてあります。

如意宝珠陀羅尼經には阿弥陀仏が一切衆生に利益を授けんが為に吒呾尼天（日本では豊川稻荷の如き）の形を現じては壽、福を施こし聖天の身を現じては二世の障礙（此世から未來にかけて信心や修行を礙げる煩惱、所知等のさわり）を払い、愛樂明王となつては愛嬌を授け共にそれを縁として遂に悟りを開かせると説いてあります。

仏說弁財天經（不空訳）には怨敵退散、諸人敬愛、一切福田、財宝満足の利益を明かし弁財天女の宝冠の中に居る白蛇を宇賀神と稱し、これ即ち阿弥陀仏の化身であることを説き、あらゆる障礙を払い財宝、壽命、愛敬を授けて無上菩提を得せしむることを明かす。

宇賀神白蛇經（三藏童壽訳）にも、貧を転じ福を衆生に能えんが為に阿弥陀仏は種々の形を示現することを説かれている。謡曲の竹

生島にも「漆^{かたじけ}なくも此の島は九生如來の御再誕なれば殊に女人こそ参^{まゐ}るべけれ」とあるが此の島とは弁財天を指し、九生如來とは觀無量壽經に説かれてゐる九品の阿彌陀如來のことであつて、障^{さか}りの重い女人を特にお救い下さる誓願により弁財天と云う女身を示現して福德壽命を授けらるるのであるから女人は特に信心して参詣しこれを縁として淨土へ往生を願うようにすすめると共にその功德を嘆じたものである。

使呪法經、大使呪法經、秘密儀軌等には阿彌陀如來が大聖歡喜天と示現せられ、珍利を積ましめ、七珍を豐足せしめ壽命長遠、福録自至と諸々の望みを叶えさせらるることを説く。金光明最勝王經の壽量品には短命の者や、不幸、貧困な者を哀みて、息災延命、除災招福の爲には壽命の根源たる阿彌陀仏を頼みお念仏せよと親切に説いてあります。

蓮花三昧經には同じく阿彌陀仏が衆生を救わんが爲に虚空藏菩薩と姿を変え、あるいは地藏菩薩を示現して私達に利益を授けてお救

い下さることが詳説されて居ります。

又、お不動様の御信仰も盛んで靈驗愈々あらたかですがこのお不動様が頭の上に白い蓮台を戴いて居られる意味を知られるお方は恐らくあるまいと思います。これは利益を与えることを縁としてお念仏の信仰に入らしめ、遂には頭上の蓮台に乗せて阿彌陀如來の淨土へ送り届けんとする御誓願を表わすものであります。お不動様は如何なる極重惡人をも摂伏^{しやくふく}してこれに種々な利益を与えて悉人^{しやくじん}阿彌陀の淨土へ導かんとする大悲心を以て阿彌陀の使者となつてお念仏の信者をお守り下さるのでありますから、このみ心を知らずしてただ現世利益のみに心を奪われて最後のお救いを忘れることは甚だ悲しむべきことであります。この故にお不動様にもお念仏を称えておすがりするのが一番に喜ばれ利益も早く戴けるのであります。

その他、変つた処では阿彌陀如來が、惡魔

や怨敵や惡人を降伏する爲に大威德夜叉明王となつて示現せられ、この明王の威力によつて調伏法を修せばその靈驗の恐るべきことは如何なる明王よりも威力があると調伏法の中に説かれてあります。

阿彌陀仏が衆生濟度の爲に利益を能え給うことは一切經の各所に説かれてありますが、これ即ち吾々衆生を極愛し此世も未來も共に満足せしめたいとお慈悲を表わしたものであります。この最勝、最大の利益を得るには一心に念仏することが至要なのであります。名体不離と云つてこの限り無き利益は南無阿彌陀仏と称うる念仏の聲を通して与えて下さるのがこの仏の本願です。

与えて救う仏の親心を知らばただ念仏して親子の情を深めてさえ行けばその人その人の境遇に應じて不思議な感應が受けられます。要は各人の信心次第です。諸国靈場の縁起や伝説にも如何に阿彌陀利生の靈驗が多いかを見ても知らるる通りである。



—五重相伝のお話し—(4)

藤井実応

二重授手印

(三) 三心

心の置き方。念仏申す者の心の置き方を安心あんじんといい、これに三心が説かれています。「極楽に往生せん」と願うものは三心を具足せねばならぬ、三心を具足すれば必ず往生を御する」と観無量寿經にあります。

1 至誠心しじょうしん まごころ、すなおな心、かざらない心である。善人は善人ながら、悪人は悪人ながら、愚かなものは愚かのまま、生れつきのままにて助けたまえと願う、それが至誠心であります。

2 深心じんしん 深く信ずる心である。私ごとき愚悪のものは解脱の道なきものと深く信じ(機の信)、ただ阿弥陀仏の本願、

必ず私をお救い下さると深く信ずる(法の信)心であります。法然上人は「生死まうじの家には疑を以て所止とし、涅槃みやどの都には信を以て能入す」(選択集)といい、「本願に乗ずるには信心の深きによるべし」(小消息)と示されました。このように三心の中でも深心が特に主要であると説かれ、信門浄土教の正意を開顕されました。この深心も要は、南無阿弥陀仏にて往生するぞと思いとるうちにこもっております。

3 廻向発願心えこうはつがんしん 阿弥陀仏の浄土、極楽に生きたいと願う心であります。すべての善根を往生極楽の道にふりむけてゆく心です。また極楽に往生し、速かに修行して、再びこの世に還かえり来り、有縁の人々を導こうと願う心が、この中に含まれています。

三心に分けていうとむつかしいように思われますが、すなおな心で深く信じて、阿弥陀仏の浄土に生れたいと願う心、

これが三心であります。このの三心は「助けたまえ」の一心におさまります。三心即一心です。

「南無阿弥陀仏というは、別したる事には思うべからず阿弥陀ほとけ、われを助けたまえという言葉を心得て、心には阿弥陀ほとけ助けたまえと思ひ、口に南無阿弥陀仏と称うるが、三心具足の名号にてあるなり」と、法然上人は常に仰せられたとあります。

(四) 五 念 門

1 礼拝門 阿弥陀仏を礼拝すること。

2 讃歎門 阿弥陀仏を讃歎す、念仏はこれの中にある。

3 観察門 阿弥陀仏及びその浄土のすがたを、心に集中して観察する。

4 作願門 阿弥陀仏の浄土に往生せんことを願う。

5 回向門 すべての善根を浄土にふりむけ往生を願ひ、また修行の上は再びこの世に還り、ゆかりある人を導こうと願う。

この五念門は、天親菩薩の「往生論」、曇鸞大師の「往生論註」にくわしく説かれましたが、後に善導大師はこれを一

層明にしようとして五種正行（前述）とせられました。それゆえこの五念門も要するに南無阿弥陀申す中にふくまれるのであります。

(五) 四 修

念仏者の生活態度。これは念仏を策励するきまりで、念仏者の生活態度です。これを作業とも申しています。

1 恭敬修 敬い拜む態度、生活である。阿弥陀仏はじめ観音勢至諸菩薩や、仏法僧の三宝や、善知識を敬うこと。その他、人に対しても、物を扱うにも、仕事をするにしても、みなこの敬いの態度をもつてするのが恭敬修であります。

2 無余修 念仏以外の余行をまじえないで、専心念仏を修すること、一すじの道を進んでこそ物事は成就できる、正信の念仏一行で進むのです。迷信邪教などに迷わぬ生活、それが無余修であります。

3 無間修 念仏を相続することです。最もすぐれた相続は念々相続で、元祖（法然）や二祖（聖光）が一日六万七万の念仏を修せられた如きであります。次に時を隔てず念仏を相続するのが、時々相続で、最低は一日少くとも一回は念仏

申す日々相續であります。何れでも念仏を相續すれば往生できる。またわれら凡夫は、あやまちを犯し罪をつくることがある、その時には念仏してサンゲするのであります。「念々の称名は常のサンゲなり」ともいわれています。念仏を主とする、たえまのない生活、それが無間修であります。

4 長時修 前の恭敬・無余・無間の三修を、今日より臨終の夕に至るまで相續し、たえず如来の光明に照されて、日に新たに、日々に新たに改め進む生活が長時修であります。四修も、ただ本願を信じて南無阿弥陀仏申せば、法爾自然の道理にて、如来の導きにより明るい浄らかな生活が展開されてくるのであります。この四修も要するに南無阿弥陀仏申すうちにこもっています。

(六) 三種行儀

念仏修道の行儀。あらゆる生活が悉く念仏の中に行われるのが、念仏者の生活様式であります。特別の宗教儀礼も加えて三種とし、三種行儀が説かれています。

1 尋常行儀 これが法然上人のすすめられた念仏で、いつでも、どこでも、平常のまま念仏してゆく、行住坐臥、時

と処と事との如何を問わず、南無阿弥陀仏の中に生活してゆくの尋常行儀であります。

2 別時行儀 ときどき、一日とか、三日とか、七日とか、日時を別にして念仏を励むのであります。有難い尋常の念仏も、ともするとおろそかになり勝ちですから、時々ネジをかけ、大掃除をするように、別時念仏を修して、身も心も励まし、調え、進めるのが別時行儀であります。

3 臨修行儀 最後臨終の時は静かに念仏の中に、仏の来迎を仰ぎ往生できるように、別時に準じて、周囲をととのえ、念仏申されるように、本来も周囲の人も心がけるが、臨終行儀であります。

以上、三種行儀も念仏の中におさまります。

(七) 結帰一行三昧

これを奥の図の伝と申しています。

「我が法然上人の言はく、善導の御釈を拝見するに、源空が目には三心も、五念も、四修も皆俱もに、南無阿弥陀仏に見るなり」

授手印には前述の、1五重正行、2正助二業、3三心、4

五、念門、5四、修、6三種行儀の六重二十二件にわたって浄土宗義が説かれています。これは結局それら一切の行業はみな南無阿弥陀仏に結歸するのであります。一枚起請文にも「ただし三心四修と申すことの候は、みな決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思いうちにこもり候なり」とあるのも同趣旨であります。

今聞いて今に忘るる身なれども

南無阿弥陀仏の残るうれしさ

三重 領解末代念仏授手印

三祖記主禪師然阿良忠上人作

△伝灯分△

浄土宗三祖記主禪師、諱は良忠、字は然阿と号せられた。

父は摂政京極師実公六世の孫、円尊で、母は伴氏。土御門天皇正治元年（一一九九）七月二十七日御誕生、その地は現在では、島根県三隅町、良忠寺となっております。十一才三智法師、父の館にて往生要集を講ずるを聞き早くも発心し、十

三才出雲の鰯渕寺に入り仏道修行、一度に八十行の經文を暗誦して側近の人を驚かしたそうです。十六才得度、京都奈良等を遍歴して、あらゆる仏教々学を研鑽すること十七年、三十四才本国に帰り、多陀寺（現在真言宗）にて不断念仏を修しておられた。或る日、九州彦山の僧、生仏法師が訪ね来り、「法然上人の遺弟に、すぐれたお方がたくさんあるが、その説かれる処多少異なるので、どの師について教をうくべきか思い悩んで信州善光寺にお参りし、如来の指示を仰いだ。が、或夜、靈夢にて、鎮西（九州）の聖光房こそ、よく往生の道を知っている、彼の僧の許へゆけとの夢告をうけて、悦び御礼申して、これから聖光上人を訪ねようと九州に赴く途中です」と。禪師はこれを聞き、非常によろこび、一日おくられて出発、久留米の善導寺に到着されたのは嘉禎二年（一二三六）九月七日。聖光上人は五里ほど離れた上妻（こうづま）の天福寺に居られたから、翌八日天福寺に赴き、ここに初めて二祖上人に面謁されました。二祖と三祖の尊い「出會い」であります。二祖は七十五才（法然滅後二十五年目）、三祖は三十八才でありました。これより聖光上人を師範と仰ぎ、専ら浄土の教行を学ばれた。慧解天然にして恰も宿学の如く、法鏡を

扣^{たた}けば、幽谷声に應ずるが如くでありますから、二祖上人は人を得たるをよろこび、一宗の秘奥悉くをさすけられたのであります。翌嘉禎三年（一二三七）四月十日、一宗の譜脈並に戒脈を相伝し、七月十六日に聖光上人は良忠上人を特に「招いてその許は吾が亡き後、吾れに代つて広く世にこの教法を伝えてくれよ」と宣^{のたま}まい、八月一日に「末代念仏授手印」一卷を親しくお授けになりました。その書の奥書に、

「法然上人浄土宗の義を以て弁阿に伝う、今また弁阿相承の義並に私の勘文徹選択集を以て沙門然阿に譲与し畢んぬ。之を聞かん人、慥^{たしか}に之を信じ之を行じて往生を遂ぐべし、仍て秘法を録するの状年次を以てす」

とお書きになりました。良忠上人は国師の厚き恩顧に感謝し、再三授手印を翻読して同月三日、此の書に対して、自身の領解を記述して領解末代念仏授手印鈔一卷とし、直ちに二祖上人に供せられました。国師はこれを御覧になり大によりこび認可なされて、「我法は悉く然阿に授けおわった、法灯はほろびない、門弟はわしが若くなつたのであるぞ」と申された。三祖はかくて浄土宗三代の重責を負われ、同月下旬、二祖の許を辞して郷里の石見に帰り、新しき信仰のよろこび

を以て、随所に選択本願の念を弘通し、安芸国（広島県）その他に線をもすび、其の間十年、寛治二年（一三四八）五十才の春、関東に赴かれて法幢をひるがえし、多くの門弟を養い、浄土法門興隆の基礎を固められたのであります。（鎌倉の本山光明寺は三祖の創立）弘安九年（一二八六）八十九才で入寂せられました。

△正説分△

「領解抄」の領解というのは解知、解了ともいい、わがものとなつて、はつきりとうけとりわかつたという意であります。授手印に示されたみ教をかように領解した所信をお述べになり、二祖に呈せられて、二祖がよろこび認可せられたのであります。如何ように領解せられたのでしょうか、三心等について詳細に味われ、三心四修五念みな称名念仏の一行に帰する二重のみ教の通り領解せられたのであります。その要は元祖上人の「ただ往生極樂の為には南無阿弥陀仏と申して疑なく往生するぞと思ひとりて申す」こととなります。われらもかように領解することが、この三重の「領解鈔」のみ教を頂いたことになるのであります。

聖典物語

カピラ城の滅亡(4)



た ん せん
つ る た

釈迦族のはげしい抵抗に逢い、その上、兵数も不明なのに狼狽し、さすがの大胆不敵、暴虐な王も、士気が完全に砕けて戦いが敗れるのを恐れて来ました。

この時、侍従の好古は、王の前に進み出て、

「大王よ、いささかもおそれることはいりませぬ。彼ら釈迦族は、みな戒をたもち虫をも害しませぬ。たとい己が命を失うとも、人を害しませぬ。彼等は殺傷を好みませぬ。よく御らんなさい。誰れ一人も我が兵は傷ついていませぬ。前進なさるがよい、必らず釈迦族を打ち破ることが出来ますと献言しました。

暫く考えていた王は、やっと決心がついたのか、

「進めっ！」

と、全軍に進撃命令を下しました。

今にも、両軍の間に一大接戦が展開されるかと思われました。

釈迦族は一層はげしい矢の雨を降すと、射撃を中止して一斉に退きました。潰走したのではなく、予定の退却だったのです。カピラ城へ退いて来た釈迦族は、城門を固く閉じて城を死守することになりました。

戦意をとりもどしたる王の大軍は砂煙をあげてカピラ城へ押しよせ、城を幾重にも包囲してしまいました。

る王は、軍使をやって城中にこう申し入れて来ました。速かに城門を開け、若しきき入れないならば、力を以って開かせて見せる。一たん攻め入るならば、一人もゆるさぬ。

捕えてみな殺しにいたすぞっ！」

この申し出におどろき、どうしてよいのかわからなかった
釈迦族は、お釈迦さまの許へ使をやり、

「ただ今、国難が降りかかって参りました。危急存亡の時
が迫って参りました」

とことの次第を訴えますと、

「若し城門を開く時は、傷づつきそこなわれ、門を開くこ
となければ、そこなわれることはあるまい」

と教えられました。

使の者が城に帰ってこのことをみなに告げると、守備を更
に厳重にしました。

るり王は、城門に屯^{たむろ}して守っている釈迦族の兵に、

「速かに城門を開け、そして双方ともに和睦いたそうでは
ないか」

と、打って変った和睦の言葉に、城中は甚だ動揺^{どうよく}して来ま
した。或る者は、直ぐ門を開くことを称え出し、或る者は、
門を開くことを断じて承諾しませんでした。

この時、甲鎧を身につけた舎摩^{しゃま}というまだ十五才になつた
ばかりの可憐な少年武士、敏捷に城壁を乗り越え、大刀
をひつさげ勇敢にもただ一人、るり王の軍兵のまった中へ
斬って入り、鬼神のようにあばれ廻り、むらがり襲うて来る

敵兵を斬って斬りまくりました。まるで一人で大軍を粉碎せ
んとした戦意にもえているようでした。

「あの豪の者は！ あれは、何者であるか。

天の神か、それとも鬼神であろうか、遙かに眺めると、ま
だ少年のようであるが？」

るり王は、少年武士の豪胆をほめながらも、自分の方向に
襲いかかろうとしている気配に、寒気を催していました。少
年武士につづいて釈迦族はどっと打って出て、ここに激烈な
攻防戦が展開されると思ひ外、釈迦族は屈強な武士数人を使
してこの舎摩少年を羽がいぜめにしてつれもどした上、きつ
く叱りつけました。

「お前は、幼少なのに何故にわれ等の種族の名を辱かしめ
ようとするのか、われらは日頃から天の善法を修めるもので
あることを知らぬのか。われらは、一人でもって万人を敵と
するに難くはない。しかし、いたずらに殺傷はいたしたくは
ない。お前は、速かにここを去って行け、ここに留ってはな
らぬ」

こういいふくめられた舎摩少年は、いたし方なくいずこか
へ去って行きました。

るり王は、尚も使を出して、

「速かに城門を開け、もはや、とやかく思案する必要はあ

るまい」

と開門を再び迫って来ました。

釈迦族は、るり王の軍が何倍もある優勢な兵力であることをおそれ、或る者は門を開いたならば身は安全であろうと主張し、或る者は死を以って固守しようと唱え、議論は紛々として容易に決定しませんでした。しかし結局、投票による多数決にしようということになりました。投票すると、開門に賛成の方が多かったのですが、さてとなると、結果を恐れて躊躇してしまいました。

「汝等、速かに城門を開け！ さもないと、あとでひどい目に逢うても知らぬぞ」

と叫び立て、今にも門を蹴破って入ってくるような不気味な雲行きになって来ました。

七度も投票が行われ、終に門を開くこととなりました。門を開くと同時にるり王の軍兵はふっと喚声をあげなだれを打って城内に入ると、釈迦族の一人も逃げ出さないよう城門を固く閉ざしてしまいました。

強暴なるり王は、勝ち誇ったように大音声で叫びました。

「釈迦族の人民は極めて多数である。いちいち刀で斬り殺すことは出来まい。彼等をひとつとらえ男女老少を問うことなく、身体を地中に埋め、その上を大象に踏ましめて皆殺にせ

よ。だが、みめよき婦女子を生けどりにいたすことは忘れるなっ！」

寛容な処置に出るとの思いの外、約に反した言葉に、城内はひじょうな混乱におち入り、やがて戦慄すべき光景がくりひろげられました。人々はつぎつぎに街の広場に引き出され、土を堀り穿った穴に腰から下を埋められ、巨象に踏まめるといふ惨虐が行われました。街のいたるところで暴行と略奪が行われ、恐怖の絶叫と、断末魔の呻き声が街にみちました。

悪魔のようなるり王は、その光景を眺めてほほに惨忍な笑をたたえていました。

街のいたるところで暴行と略奪が行われ、恐怖の絶叫と、断末魔の呻き声が街にみちていました。

釈迦族のいたましい運命を目の前に見て悲しみ悩み、これ以上虐殺されるのにしのびなかった王の摩訶男は、るり王の所に行き、

「王よ、わたしの一つの願いをゆるしてもらいたい。若しゆるしてくれるなら申しませう」

とねがいました。

外祖父でもある摩訶男の願いに、るり王はていねいにききました。

(つづく)



宝物シリーズ

=初期のカブキ=

この写真は江戸初期（十七世紀前半）に成立した『国女歌舞妓絵詞』に収められている出雲の阿国の念仏踊りの図である。一見、念仏踊りと歌舞伎踊りは直接関係ないように見えるが、この詞書の部分をみると、「今日は正月廿五日、貴賤群集社の参の折からなれば、カブキ踊りを始めばやと思ひ候。先々念仏踊りを始め申そ。光明遍照 十方世界 念仏衆生 撰取不捨 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏……」とあるように、カブキ踊りのはじめに念仏踊りを踊っていたことがわかる。

カブキは「かぶく」（頭を傾ける、異様なみなりをする）という動詞から転化した言葉であり、「風流」（みやびやかな、はなやかな）と同じように、能や狂言などのオーソドックスな先行芸能に対比する一般的な総称であり、江戸初期の記録には歌舞伎はなく、カブキ踊りと書かれているものが多い。おそらく初期の阿国歌舞妓は現在の歌舞伎のようにまとまったものではなかったと思われる。阿国は当時世間で流行していた能・狂言・念仏踊り・小歌等の先行芸能の長所を巧くみに取り入れ、これを世俗的な表現で強調したところに彼女のカブキ踊りがもてはやされたのであろう。

（宇高良哲）

昭和四十五年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和四十五年三月二十五日印刷 昭和四十五年四月一日発行

浄土

第三十六卷

第四号

定価金九十円(送料六円)

法蔵館

京都下京区正面烏丸東
振替京都2743・電話371~0458

新全集 仙教童話

監修 浜田広介・中村 元
編集 花岡大学

解説付 菊判・上製本・函入・各¥700

全8巻 別巻1

予約受付中
内容見本呈

混乱の世相の中で子供を正しく育てようとする意欲的な執筆者によりインド・中国・日本の説話、伝承から取材し、保育現場や家庭の要望にこたえる心あたたまる画期的全集

特色の二三
幼児には読んで聞かせ、小学生は自分で読んで下さい。大人も読めば童心がよみがえり、それぞれの話がどんな事情で成立したか、中心的な意味、取扱い方など専門学者の解説

内容
1 ジャータカ(月の名人、さるのはなしなど)花岡大学著・6 逸話I(釈迦・法然・良寛など)山本和夫・久保喬他著・別巻 年中行事12ヶ月
2 仏典I 3 中国逸話II 4 日本逸話I 5 ひろすけ幼年童話集 6 逸話I 7 逸話II 8 日本名作別・年中行事既刊・発売中(毎月一冊二冊ずつ刊行)

国内・国外・旅の御相談は……

旅は楽しいプランから一目的地、コースの選定、宿舎、旅券のお手配など、ごめんどうなことはなんでもお申しつけ下さい。

パン コク シヤ
(株) 萬 告 社 観光部

東京都品川区東五反田2~1~3

Tel (441) 1693・7012 東京都登録法人第61号

「浄土」購読規定

一部定価九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 四月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和四十五年三月二十五日印刷
昭和四十五年四月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会